



## ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲

### 弦楽四重奏曲 第11番

「弦楽四重奏曲 第11番」(1966)は、ショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲を多数初演したベートーヴェン弦楽四重奏団の第2ヴァイオリン奏者、ワシーリー・シリンスキーの追悼のために書かれた。全7楽章で構成され、「第1楽章：イントロダクション (Andantino)」 「第2楽章：スケルツォ (Allegretto)」 「第3楽章：レチタティーヴォ (Adagio)」 「第4楽章：エチュード (Allegro)」 「第5楽章：ユモレスク (Allegro)」 「第6楽章：エレジー (Adagio)」 「第7楽章：フィナーレ (Moderato — Meno mosso — Moderato)」の順に、アタッカで(切れ目なく)演奏される。

### 弦楽四重奏曲 第12番

「弦楽四重奏曲 第12番」(1968)は、伝統的な調性と十二音技法を融合させた独創的な作品。ベートーヴェン弦楽四重奏団の第1ヴァイオリン奏者、ツィガノフに献呈された。全2楽章構成だが、第2楽章が全体の約4分の3を占める。「第1楽章：Moderato」は、チェロが12音の音列を提示するが、すぐに変ニ長調の穏やかな主題へと移行する。全体として静かで内省的な性格が強い。長大な「第2楽章：Allegretto」では、4つのセクションが途切れなく続く。まず激しいトリルや急速な音型が支配するスケルツォで始まり、葬送行進曲のように深い悲しみと絶望が表現されたアダージョが続く。そして、第1楽章の主題や断片が夢のように再登場し、これまでの音楽を統合する回想部を経て、フィナーレでは12音技法のモチーフを駆使しながら、最後は力強く肯定的な変ニ長調で締めくくる。

### 弦楽四重奏曲 第14番

「弦楽四重奏曲 第14番」(1973)は、ベートーヴェン弦楽四重奏団のチェリスト、セルゲイ・シリンスキーに捧げられたため、チェロが主導的な役割を果たす。全3楽章で構成され、まず「第1楽章：Allegretto」は、快活で遊び心のある主題で始まり、チェロとヴィオラのカデンツァが登場しながら、緊張感を持って展開する。緩徐楽章に相当する「第2楽章：Adagio」では、第1ヴァイオリンとチェロによる情熱的な二重奏が中心となる。前楽章から切れ目なく演奏される「第3楽章：Allegretto」は、自作の歌劇《ムツェンスク郡のマクベス夫人》のフレーズが引用され、最後は静かに消え入るように終曲する。